はしがき——執筆者のことば——

本書は日本銀行創立百周年の記念事業として刊行したものである。本書の内容は明治15年の創業以来百年間にわたる金融政策運営の推移を客観的に叙述したもので、本文6巻（約3000ページ）および資料編1巻で構成されている。本書の編纂は日本銀行にとり創業以来初めての本格的な修史事業である。これまでに公刊した日本銀行の通史としては「日本銀行八十年史」があるが、同書はその「あとがき」にも書かれているように、だれにも親しまれやすいものを作るという趣旨で短期間に作成されたもので、今回の百年史とはその性格を全く異にしている。以下本書の編纂方針、編纂作業の経緯などについてごく簡単に記しておきたい。

昭和52年秋、本行の役員集会において、昭和57年に迎える創立百周年の記念事業として「日本銀行百年史」を編纂、刊行することが決定された。そして編纂事務を担当するプロジェクト・チームを設置することになり、同年12月私はその責任者に任命された。このプロジェクト・チームは内部規定によらない臨時の組織で、非公式に百年史編纂室と呼称したが、これまで室員総数7～12名で編纂作業を進めてきた。

昭和53年1月に、百年史編纂に関する基本方針等を審議するため、前川副総裁を委員長とする百年史編纂委員会が設置された。同委員会は当初、委員長のほか本行委員4名（担当理事、総務部長、

調査局長、百年史編纂室長）と委嘱委員３名（吉野俊彦、呉文二、西川元彦）で構成された。その後前川副総裁は総裁に就任したが、引続き委員長となり、担当理事は当初の中川幸次から三重野康に交代したほか、金融研究局長が本行委員に加わり、委嘱委員に中川幸次が加わった。

昭和53年２月に開かれた第１回百年史編纂委員会において、次のような基本方針のもとに編纂を行うことが決定された。

一般に周年記念の年史には色々なタイプがあるが、百周年という大きな節目を迎えた中央銀行の記念事業にふさわしい内容と特色を備えたものとするため、叙述の対象を金融政策一本に絞ることにする。そしてこれまで百年間の金融政策運営の推移とそのもろもろの背景を客観的に分析、叙述することにより、①今後における金融政策運営の参考となり、②学界における金融問題研究に貢献し、③併せて各界の金融政策運営に関する理解を深める、といった諸目的に十分寄与できるような内容とレベルの百年史を編纂することにする。

叙述の対象は狭義の金融政策だけでなく、広く金融市場・制度・慣行などについての改善努力や、これに関連する内部の機構改革などを含むセントラル・バンキング一般とし、執筆に際しては既存の金融史研究の成果を活用するとともに、各時代ごとに政策当局の抱いていた政策理念、政策効果の浸透メカニズム、政策運営の成果と問題点（評価）につき極力具体的に明らかにする。編年史方式をとらず、やや大づかみに時代区分を行い、各時代ごとにその特色を浮

び上がらすような形式で重点的な記述方式をとることにする。

編纂委員会においては、以上のような基本方針が決められたほか、前川編纂委員長より「客観的立場に徹して執筆を進め、この点につきいやしくも後世の批判を受けることのないように」との激励の言葉を受け、編纂作業は本格的にスタートした。

本書の執筆方法については、百年史編纂室次長の武藤正明、鈴木恒一の両名と私の共同研究に基づき、3名がそれぞれ分担して執筆し、最終的調整は私が行うこととした。

金融史の専門的な研究家でない私たち執筆者にとって、前記のような内容の百年史の編纂は大変困難な作業であった。編纂の準備過程でとくに苦労したのは、ここ十年余りの間に急速に進展してきた学界での金融史研究へのフォロー・アップと資料の収集の2点であった。私たちは金融史研究にかかわりのある主要な学者を招いて専門分野につきレクチャーを受けるとともに、本書編纂に対する要望も伺った。これまでに高垣寅次郎、田中金司の両先生をはじめ、39名の先生方から貴重な御教示を賜わり、また土屋喬雄先生からは準備段階で作成した数千ページの研究メモにつき丹念な御指導を頂いた。今日までに御教示を頂いた諸先生の御芳名は本稿末尾に記載の通りであるが、ここに第1巻を刊行するに当り諸先生の御芳情に対し深く感謝の意を表する次第である。

本書の編纂にとって、関係資料をどの程度まで収集できるかは非常に重要な事項であるが、過去百年をかえりみた場合時期により変化はみられるものの、大勢として本行では、政策決定をめぐる諸事

情についての詳しい説明資料を公的記録としてはあまり残さないという慣行があったこと、大正12年の関東大震災によって本店が保有していた資料（帳簿類も含め）の多くが焼失したこと、などから資料整備には当初から大きな制約があった。しかし松尾第６代総裁をはじめ歴代総裁、役職員などの御遺族から新たに提供を受けたり、大蔵省財政史室、臨雲文庫、山形県立図書館などからその保有資料の利用につき格別の御協力を頂き、あるいは設立年代の古い支店に保存されていた本部作成資料の発掘などによって、既存の本行保有内部資料と併せ、編纂のための資料整備をある程度進めることができた。これらの資料収集に多大の御協力を頂いた方々、機関に対し改めて厚くお礼を申し上げたい。

先輩からのヒアリングも含め、以上のような編纂準備を重ねた上、百年史目次を作成し、昭和56年４月の第３回百年史編纂委員会で了承を得た。前記の通り編年史方式をとらぬことは当初から決められていたが、具体的にどのような時代区分を設けるかは難しい問題であった。経済、金融の発展段階からの区分、景気変動の観点からの区分、本行設立の根拠法規による区分、など色々な考え方が当然ありえたが、本書では中央銀行の政策運営に大きな枠組みを設けた発券制度の面から、金属本位制度時代とでも称すべき前編（昭和６年まで）と管理通貨制度時代の後編（昭和７年以降）の２編に大別し、さらに各編につき金融政策運営の特徴点をとらえて数章ずつに分割した。前、後編への区分に関しては、前編の対象期間のすべてが制度上厳密な意味での銀本位制度あるいは金本位制度であった

というわけではないこと、また管理通貨制度への移行時点を、兌換銀行券条例中の正貨準備規定が廃止された昭和16年、あるいは日本銀行法の制定された昭和17年に求める考え方もありうることは否定できないが、本書では中央銀行の金融政策運営につき発券制度面から実質的に許容された自由度の大きさという観点から全期間を二分し、銀行券保証発行限度の大幅拡張によりこのような自由度が飛躍的に増大した昭和7年を大きな転換点として上記のように区分した。また前、後編をさらにそれぞれ数章に区分するに際しては、上記のような時代区分に関する色々な基準を念頭におきながらも、ある期間における金融政策運営の共通した特徴点をとらえるという観点に重きをおいて章別の編成を行った。

編纂作業を開始してから4年半を経過したが、これまでの作業過程をかえりみると、叙述の対象である百年という期間は私たちにとって余りにも長く、その意味で準備期間は余りにも短かかったというのが、現在の私たちの偽らざる実感である。当初は金融政策運営をめぐる諸環境につき、経済金融思潮の変遷なども含め極めて多面的に分析したい、金融市場・制度・慣行の変遷とこれを通ずる政策効果浸透のメカニズムを時代ごとに詳細に明らかにしたい、国際経済、金融環境との相互作用に大きな照明をあてたい、マクロ的な経済金融分析手法を活用したい、などと大きな抱負を抱いていたが、時間の制約に加え私たちの能力の限界もあり、実際には不十分な形にとどまらざるをえなかった。しかし本百年史全7巻の編纂が中央銀行による本格的な金融政策史研究への第一歩を印したものとし

て、前述の編纂目的にいささかでも貢献できれば、執筆者としてこの上ない幸せである。

なお今後御教示を頂いた諸先生、全期間を通じ資料の提供などに御協力下さった方々、ヒアリングで御教示頂いた諸先輩の御芳名、ならびに百年史編纂委員会の全委員の氏名、編纂業務に従事した百年史編纂室員の氏名は、本文最終巻（第6巻）末尾の「あとがき」のなかに掲載する予定である。

昭和57年9月

百年史編纂室長　石川通達

（付）　御教示を頂いた諸先生の御芳名

（敬称略、五十音順）

浅井良夫	朝倉孝吉	麻島昭一
安藤良雄	石井寛治	石田定夫
泉川　節	伊藤正直	内野達郎
江見康一	大川一司	岡橋　保
加藤俊彦	呉　文二	香西　泰
後藤新一	向坂正男	篠原三代平
渋谷隆一	志村嘉一	高垣寅次郎
田中生夫	田中金司	土屋喬雄
靄見誠良	寺西重郎	外山　茂

中島将隆	中村隆英	西川俊作
早坂　忠	原　　朗	原　司郎
藤沢正也	藤野正三郎	三和良一
迎　由理男	山口和雄	山本有造

以　上